

日超医83エッセイ 世界超音波医学学術連合(WFUMB)理事会と私



渡辺 決

京都中央看護保健専門学校・学校長

京都府立医科大学・明治国際医療大学・名誉教授

社団法人・日本超音波医学会・名誉会員

[略歴]

渡辺 決 Hiroki Watanabe

1935年1月20日生(75歳)

[学歴および職歴]

1960年 東北大学医学部卒業。1965年 東北大学大学院修了。医学博士。

1967年 東北大学講師。1976年 京都府立医科大学教授(泌尿器科学)。

1998年 明治鍼灸大学大学院教授(予防医学)。2004年 附属病院長兼務。

2007年 京都中央看護保健専門学校学校長。

[学会役員]

日本超音波医学会会長(1994-95)。AFSUMB会長(1998-2001)。WFUMB会長(2000-03)。

日本腎泌尿器疾患予防医学研究会世話人代表(1990-98)。

日本がん検診・診断学会副理事長(2009-)ほか。

米国・イタリア・ベネズエラ・フランス・インド・ポーランド・オーストラリア・日本・各超音波医学会名誉会員。米国泌尿器科学会(AUA)名誉会員ほか。

[受賞]

日本泌尿器科学会「坂口賞」(1975年、経直腸的超音波断層法の開発)。

アメリカ超音波医学会名誉賞(1997年、泌尿器科超音波診断に貢献)。

朝日がん大賞(2003年、前立腺がん集団検診システムの開発と普及に功績)。

日本超音波医学会特別賞(2008年、超音波医学の研究と世界の超音波医学の発展に貢献)。

1982年の初夏、英国ブライトンで開催された第3回世界超音波学術連合(WFUMB)大会から帰国したばかりの私の許に、WFUMBの前期会長だった順天堂大学の和賀井敏夫教授から電話があり、私をWFUMBの指名理事(選挙によらず会長が指名する理事で、発言はできるが投票権はない)に推薦しておいたからしっかりとしてほしいとのお話があった。突然のことでびっくりしたが、まだ東北大学から京都府立医科大学へ赴任して数年の新米教授を抜擢していただいたことに感激し、これは期待に応えなければならないと覚悟を決めた。

覚悟はよかったのだが、翌年初めてWFUMBの理事会に出席した時には本当にショックを受けた。何しろ出席者は全員初対面である。どこから来たどんな立場の人か、紹介されて握手しただけでは何も分からない。会議が始まったら、聞いたこともない会議用語を連発され、英語は早口で全然聞きとれない。配布された資料でやっと何を議論しているのか理解する程度である。とにかく「賛成」にはfavour, approve, for、「反対」にはoppose, object, againstなど、いろいろな言い方があることすらその時初めて学んだ次第だった。私と一緒に理事になった札幌医科大学の福田守道教授は、私と違って留学経験があったからかなりhearingの能力が高かったが、昼休みに私を眺めて、「先生、顔が真っ青ですよ。」と半ば心配、半ば冷やかされたのを憶えている。

後から分かったのだが、WFUMBの理事といってもラテン系の人たちの英語は相当ひどく、またnative speakerであっても米国南部やオーストラリアあたりの出身者は独特の訛りが強いので、聞きとれないのはあながちこちらの責任だけでもなかった。しかし皆、英語力とは関係なく自分の主張をがんがん述べ立てる。とても我々日本人にはまねができないと感じた。だから初めの数年間は訊かれたことに答えるのが精々だったが、10年も経ってそろそろ自分の理事会内での地位が確立されるにつれ、やっと言いたいことを言わねばならない場面で言えるようになったように思う。

WFUMBの任期は3年で、それが終わる時期に学術大会が開かれ理事が改選される(今回から任期が2年になった)。私は前記の指名理事を2期、正規の理事を2期務め、1994年に副会長に選ばれた。そこでちょうど会長の順番がアジアに回ってきて、何の抵抗もなく1997年に次期会長に選出され、2000年から2003年まで会

長を拝命させていただいた。

当時はWFUMBを構成する6つの地域連合のうち、南米（FLAUS）と地中海・アフリカ（MASU）は設立されたばかりで会長を争う力がなく、他の既設4連合の回り持ちで会長が決まっていたからあまり問題はなかったのだが、その後南米が巨大な地域連合となったため、前期会長のGiovanni Cerriはブラジルから選ばれたのは周知のとおりである。オーストラリアと地中海・アフリカの2地域連合は会員数が少ない（それ故投票権も少ない）が、それでも何とか会長のローテーションに割り込みたいと必死である。さらにアジア地域連合（AFSUMB）内部でも台湾・韓国などが力をつけてきて、これまでアジアからは日本だけが占めてきたWFUMBの会長の椅子に強い意欲を見せており、現段階での会長の選定は様々な政治的要素が絡んで複雑な様相を呈している。しかも国際学会での人選にあたっては、政治的要素よりも選ばれる個人のpersonalityの方がずっと重要視される。その意味で、今回の学術集会会長・工藤正俊教授が昨年のシドニー大会でWFUMBの次期会長（2年後には自動的に会長に就任する）に就任されたのは、日本超音波医学会員にとって近來の慶事といわねばならない。工藤教授のこれまでのご苦労が報いられたのだと思う。

私が会長を務めた3年間は、WFUMBを構成する6地域連合がそれぞれにしっかりと組織を固め、お互いに協力しつつ切磋琢磨する、よい意味での競合関係が確立された時期であった。創立当初苦しかった財政状態も改善され、Soren Hanckeという有能なSecretary（国際学会での“Secretary”は日本語の「秘書」とは違い、同じく“Secretary”という名の国連の事務総長や米国の国務長官に相当する）に恵まれて、まずは無難に乗り切れた。

会長になった時に、お世話になったWFUMBに何かひとつでも貢献をしたいと思い、いろいろ考えた末にWFUMB Center of Excellence（COE）という新しい超音波教育組織の創設を立案した。これは開発途上国で既に活動している超音波学会とWFUMBが各個に契約を結んで現地にCOEを設立し、それぞれの学会の責任で超音波教育を実行してもらい、WFUMBは名前を貸すだけという虫のいい提案だったが、幸いにして地元の学会側からもWFUMB内部からも大変な好評をいただき、たった2年間のうちに世界4カ国（Bangladesh, Uganda, Venezuela, Rumania）で活動が開始された。今ではWFUMBの諸事業の中でも将来が最も期待されているプロジェクトとされており、私も大いに面目を施すことができた。

WFUMBに関係した25年間は、私にとってほかの何ものにも替えられない得難い経験であった。そして様々な国を訪れ、多様な利害関係を調整しつつ、世界とは何か、その中で日本はどうあるべきかという問題を深く考え、かつ行動する機会に恵まれた。この知遇に感謝し、その間私を支えてくださった多くの方々に心から御礼申しあげる次第である。

なお、WFUMB・AFSUMBの創設時代の諸事情については、和賀井先生の好著「超音波診断法事始」¹⁾に詳しい。またそれ以後の経過に関しては拙著^{2,3)}を参照されたい。

文 献

- 1) 和賀井敏夫:超音波診断法事始. 日本プランニングセンター, 東京, 1987.
- 2) 渡辺 決:世界超音波医学学術連合とアジア超音波医学学術連合. 超音波医学28:1058-1066, 2001.
- 3) Watanabe H:History of WFUMB and AFSUMB. J Med Ultrasound 9: 167-175, 2001.

以下の2点の論文は、事務局にて参考のために添付しました。
なお、渡辺 決先生及び超音波医学会の編集委員会、ならびに
J Med Ultrasoundには転載許可を頂いております。

世界超音波医学学術連合とアジア超音波医学学術連合

渡辺 決

World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (WFUMB) and
Asian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB)

Hiroki WATANABE, M.D., SJSUM

世界超音波医学学術連合とアジア超音波医学学術連合

渡辺 決

World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (WFUMB) and Asian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB)

Hiroki WATANABE, M.D., JSUM

Abstract

The History and the system of World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (WFUMB), as well as Asian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB), are described briefly. It is expected that the Japan Society of Ultrasonics in Medicine (JSUM) would support them, because JSUM was an important founder society of them and has taken a leadership for them since the establishment.

1. はじめに

日本超音波医学会は、世界超音波医学学術連合 World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (以下 WFUMB と省略する、これは「ウーファム」と発音する。) 及びアジア超音波医学学術連合 Asian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology (以下 AFSUMB と省略する、これは「アフサム」と発音する。) の創始メンバーのひとつであり、それらの歴史を通じて最重要メンバーのひとつであった。

そこで、まず日本超音波医学会会員の皆さんに、両連合についてよく知っていただくことが大切だと考え、「超音波医学」の誌面を借りて両連合の成り立ちと現状を紹介することにした。

2. 世界超音波医学学術連合 (WFUMB)

よく知られているように、超音波診断学は1950年代に、米国・欧州・日本の3カ所でほぼ同時に創始された。お互いの連絡はなく、それぞれ独自に開発が行われていたため、いったい誰が真の pioneer だったのか特定が難しい。CT や MRI の開発者がノーベル賞を授与されたのに、画像診断技術の中では数の上からみ

て最も人類に貢献したと思われる超音波には、未だ授賞の声がかからないのは、そんなところにも原因があるのではないかとと思われる。

そういう事情があったために、多くの pioneer たちがお互いの業績を知り合ったとき、国際レベルで超音波医学の討論を行う場が必要だと考えたのは、至極当然のことだった。そこで国際超音波医学会 World Congress of Ultrasonic Diagnostics in Medicine を組織する気運が生じ、その第1回が1969年にWienで開かれたのである。

ここに至るまでの経由を知るには、それまでにすでに組織されていた各国の超音波学会について触れる必要がある。

世界で最も古い歴史を有する超音波学会は、おそらく米国超音波医学会 (AIUM) であろう。それ以前にどこかの国で小さな学会が作られ、すぐ消えたことはあったかも知れないが、現存するものでは AIUM が一番の老舗である。その起源は1952年にまで遡ることができ、来年に創立50周年を控え、現在そのお祝いの準備が進められている。ただしこれは、もともと超音波治療器のためにできたものであって、超音波診断の演題が現れるのは1964年以後のことだそうである。

老舗の二番手は我らの日本超音波医学会 (JSUM)

明治鍼灸大学 (Meiji University of Oriental Medicine (Graduate School) Hiyoshi-cho, Funai-gun, Kyoto 629-0392)
President, WFUMB and AFSUMB

で、1961年の創立にかかる。こちらは最初から焦点が診断に絞られていたから、世界最古の超音波診断学会であると理屈をこねられないこともない。国際的な情報から隔絶されていた当時のことから、おそらく米国に超音波学会がすでに存在したことなど誰も知らなかったに違いない。創設にかかわった方々の意気たるや、まさに壮とすべきであろう。

世界最初の国際的な超音波学会は、国際眼科超音波診断学会 *Societas Internationalispro Diagnostica Ultrasonica in Ophthalmologia* (SIDUO) である。今では眼科領域の超音波はそれほど盛んであるとはいえないが、超音波の歴史からみると、眼科は最も先行していた領域であった。第1回大会は1964年にBerlinで開かれており、その第3回はWienで開催された。前述した第1回国際超音波医学会は、実はこのSIDUOの第3回大会に相乗りして、いわばSIDUOの組織力に依存して行われたものである¹⁾。そのため国際超音波医学会はSIDUOに借りができ、後にWFUMBを組織するとき、その本来の地域ベースの思想を曲げて、専門科目別の学会も加入できることにせざるを得なかった。もう現在はSIDUO自体の力も衰えて、WFUMBに対する影響力はほとんどなくなり、WFUMBは基本的に地域ごとのfederationsだけから成っている。

さて、Wienの第1回国際超音波医学会に集まった各国の超音波研究者たちは、国としてではなく個人として参加したのであるが、すでにそれぞれの国内に学会をもっていた米国・日本・ドイツ・オーストラリアなどを中心に、将来は学会を単位として加盟する連合方式の国際組織を作ろうという案がもちあがった。そして、とりあえず4年後の1973年に第2回の国際超音波医学会をRotterdamで開催し、その時までに具体案を作成することになった。これを受けて欧州では、欧州各国の超音波学会を糾合する欧州超音波医学学術連合 *European Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology* (EFSUMB) が、1969年に創設された。これが、やがてWFUMBの創設に伴い、その傘下の最初のfederationとなる。

こうして、1973年にRotterdamで開かれた第2回の国際超音波医学会で懸案の国際組織が具体化され、その名称は世界超音波医学学術連合WFUMBと決ま

り、再び3年後の1976年に、San Franciscoで第1回の総会と学術大会を開催しようということになった。

そして、ゆくゆくは世界5大陸ごとに各国の超音波学会を糾合したfederationを組織し、WFUMBはそれらのfederationをさらに統合する上部組織に編成しなそうという構想も生まれた。

この辺りの事情は、順天堂大学和賀井敏夫名誉教授が後世の超音波関係者のために書き残された名著「超音波診断法事始」(日本プランニングセンター、1987年刊)²⁾の中に詳しい。周知のように、和賀井教授は世界の超音波pioneerの一人であり、しかもきわめて早い時期から非常に無理をされながら世界との交流に努められ、我が国の業績を世界に知らしめた最大の功労者である。我が国に日本超音波医学会が創設された時も、その中心人物として活躍された。そのため上述のように、1960年代に国際組織の構想が持ちあがった時にはすでに我が国には立派な国家レベルの学会が存在しており、国際超音波医学会の発足に際しても、WFUMBの発足に際しても、常に我が国が世界のリーダーシップをとることができたのである。その後教授は、日本超音波医学会・WFUMB・AFSUMBの各会長を歴任されることになるが、特に後述するAFSUMBという組織は、教授がいわばひとりで駆けずり回って作られたものである。超音波医学の領域で、現在のように、世界中が何事を決めるにも我が国の意向を無視できなくなったのは、もちろん産学両面にわたる我が国の実力に負ってはいらぬものの、和賀井教授が過去何十年にわたってがんばってこられた努力が、ここに至って花開いたということもできよう。

さて、San Franciscoで華々しく出発した第1回のWFUMB学術大会(WFUMB '76)は、AIUM・EFSUMB・JSUM・オーストラリア超音波医学会(ASUM)、それに前述のSIDUOなどを主体に、AIUMがhost societyとなって組織されたものであったが、以後当初の構想に基づき、世界5大陸のfederationの組織作りが本格化してゆく。すなわち、EFSUMBに続いてAFSUMBが1985年に発足した。これについては後述する。AIUMはカナダも含めた北米連合となり、ASUMはニュージーランドを含めてAustralian SocietyからAustralasian Societyと改称し

Table 1 AFFILIATED FEDERATIONS AND MEMBERSHIP OF WFUMB

Affiliated Federations	Office	1998 Members
Asian Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB)	Seoul, Korea	17,365
European Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (EFSUMB)	London, U.K.	12,522
American Institute for Ultrasound in Medicine (AIUM)	Laurel, U.S.A.	7,005
Latin-American Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (FLAUS)	São Paulo, Brasil	4,840
Australasian Society for Ultrasound in Medicine (ASUM)	Willoughby, Australia	1,232
Mediterranean and African Society for Ultrasound (MASU)	Piacenza, Italy	511
Total		43,475

た。さらに南米大陸には Latin-American Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (FLAUS) が生まれ、アフリカ大陸では開発途上国が多いという特殊事情から、イタリア・トルコなども参加する地中海・アフリカ超音波医学会 Mediterranean and African Society for Ultrasound (MASU, マーズーと発音する) が実現した。こうして現在の WFUMB は、6 つの federations によって世界全体をくまなく網羅する巨大な学術組織へと発展したのである。それらの名称と事務局の所在地、1999 年の各会員数を、Table 1 に示す。

WFUMB の活動は、すべて傘下の各 federation から拠出される年会費によって運営されている。その額は会員 1 人あたり年 1.5 米ドルである。どこの federation でも、各国の超音波学会から年会費を 3 ドル徴収し、そのうち半額を WFUMB に納め、半額を自分の federation の予算としている。WFUMB の全会員数は 5 万人弱だから、100% 年会費が納入されたとしてその予算規模は 70,000 ドル余ということになる。最近は、超音波の安全性や開発途上国の超音波教育など、重要なテーマに熱心に取り組んでいるので、予算は苦しい。しかも加盟各 federation からの年会費納入は常に遅れがちなのが、悩みの種である。

WFUMB の管理は、6 人の役員 officers, 6 人の理事 councillors, 3 人の会長指名理事 co-opted councillors (選挙によらない理事で投票権はない)、それに前期会長 Immediate Past-President, 学会誌編集長 Journal

Editor (投票権はない) の 17 名によって行われている。現在 (2000 年-2003 年) 就任している人々の氏名を、Table 2 に示す。

役員はすべて総会 (3 年に 1 回、学術大会と同時に開催される) における選挙 (ただし郵送投票を事前に各加盟 federation に依頼する) で選出される。ただ会長 President だけは、前期に次期会長 President-Elect に選出されていた人が、選挙によらず自動的に就任する。第 1 副会長 Vice-President I は会長に、第 2 副会長 Vice-President II は事務総長・会計 Treasurer に事故があった場合、ただちにこれに代わるのが主な仕事である。事務総長 Secretary の権限は絶大で、ほとんどすべてのことを 1 人で把握している。これも、国連の事務総長のことを考えれば納得できる。

理事については、会員数が WFUMB 全体の会員数の 10% 以上を有する加盟 federation は、選挙によらず 1 人の理事を指定できる。会員数が 10% に満たない federation は、2 人の理事の椅子を選挙によって争うことになるが、現在はこのような federation は ASUM と MASU だけしかないので、結局選挙はしないで済んでいる。会長指名理事は、すでに選ばれてきた役員・理事の顔触れを会長が見て、地域ごとや専門ごとの偏りを是正できるよう、適当な人を指名する。結果的に、AFSUMB・EFSUMB・AIUM の 3 大 federation は 3-4 人の、その他の federation は 1-2 人のメンバーを占めることになる。このように、管理者は各出身母体を基礎として選ばれてくるが、選ばれた以上

Table 2 PRESENT OFFICERS AND COUNCILLORS OF WFUMB
(2000-2003)

President :	Hiroki Watanabe (Japan=AFSUMB)
President-Elect :	Marvin C. Ziskin (USA=AIUM)
Vice-President I :	Kittipong Vairojanavong (Thailand=AFSUMB)
Vice-President II :	Hassan A. Gharbi (Tunisia=MASU)
Secretary :	Søren Hancke (Denmark=EFSUMB)
Treasurer :	Christopher R.B. Merrit (USA=AIUM)
Immediate Past-President :	Harald Lutz (Germany=EFSUMB)
Administrative Councillors :	Masunori Matsuzaki (Japan=AFSUMB)
	Michel Claudon (France=EFSUMB)
	Lawrence D. Platt (USA=AIUM)
	Luiz Antonio Bail o (Brasil=FLAUS)
	Robert Gill (Australia=ASUM)
Co-opted Councillors :	Elisabetta Buscarini (Italy=MASU)
	Byung Ihn Choi (Korea=AFSUMB)
	Alfred Kurtz (USA=AIUM)
	Giovanni Cerri (Brasil=FLAUS)
Journal Editor :	Peter N.T. Wells (UK=EFSUMB)

は出身母体の利害を離れて、WFUMB そのものの利益のために献身しなければならない。任期は1期3年である。

人事の実際を知るために実例をひくと、渡辺は1981年に和賀井前期会長の推挙で Kossoff 会長により会長指名理事に指名され、これを2期勤めたのち、1988年から AFSUMB から2期の間理事に指定され、1994年に第1副会長に、1997年に次期会長に選挙で選ばれ、昨年5月の総会で会長に就任させていただいた。この間20年を経過している。したがって日本超音波医学会としても、若くて有能な人を早い時期から AFSUMB や WFUMB に送りこみ、日本的な交替人事は行わずに気長に経過を眺めてゆくことが大変重要である。AFSUMB 内部でも、日本以外の国々是这样い

う欧米風の国際慣習に精通していて、きわめて政略的に人事を決めてくる。世界最大の超音波学会であり、WFUMB や AFSUMB の最も重要な創設メンバーであった日本超音波医学会も、彼らにおくれをとらないようにしていきたい。

San Francisco の第1回以後の WFUMB の学術大会は、順調に3年ごとに世界各地で成功裡に開催されてきた。それらの開催地と host society 及び大会会長を、Table 3 に示す。次回 (WFUMB 2003) は、AIUM が host society となつて、AIUM の年次大会を兼ね、2003年6月1-6日にカナダの Montreal で開かれる。次々回は韓国の主催 (2006年5月28-6月1日) である。なお、WFUMB 役員の会長 President は日本の理事長に相当し、あくまでも大会会長の President とは別の

Table 3 WFUMB CONGRESSES

Congress	Venue	Host Society	Congress President	WFUMB President
WFUMB '76	San Francisco	AIUM	Gilbert Baum	Gilbert Baum (AIUM)
WFUMB '79	Miyazaki	JSUM	Toshio Wagai	Toshio Wagai (JSUM)
WFUMB '82	Brighton	BMUS	Patricia Morley	Hans Müller (SGUM)
WFUMB '85	Sydney	ASUM	George Kossoff	George Kossoff (ASUM)
WFUMB '88	Washington, DC	AIUM	Horace E. Thompson	Horace E. Thompson (AIUM)
WFUMB '91	Copenhagen	DUDS	Hans H. Holm	Francis Weill (SFAUMB)
WFUMB '94	Sapporo	JSUM	Morimichi Fukuda	Morimichi Fukuda (JSUM)
WFUMB '97	Buenos Aires	FLAUS	Alberto E. Belinsky	Barry B. Goldberg (AIUM)
WFUMB 2000	Firenze	SIUMB	Luigi Bolondi	Harald Lutz (DEGUM)
WFUMB 2003	Montreal	AIUM	Alfred Kurtz	Hiroki Watanabe (JSUM)
WFUMB 2006	Seoul	KSMU	Byung-Ihn Choi	Marvin C. Ziskin (AIUM)

Table 4 AFSUMB CONGRESSES

Congress	Venue	Host Society	Congress President	AFSUMB President
AFSUMB '87	Tokyo	JSUM	Toshio Wagai	Toshio Wagai (JSUM)
AFSUMB '89	Bali	ISUM	Wilyarto Wibisono	Wilyarto Wibisono (ISUM)
AFSUMB '92	Seoul	KSMU	Chu-Wan Kim	Chu-Wan Kim (KSMU)
AFSUMB '95	Beijing	SUMCMA	Jian-Fan Ren	Hiroki Watanabe (Acting)
AFSUMB '98	Taipei	CTSUM	Hsi-Yao Chen	Hsi-Yao Chen (CTSUM)
AFSUMB 2001	Kuala Lumpur	MSUM	S. Raman	Hiroki Watanabe (JSUM)
AFSUMB 2004	Utsunomiya	JSUM	Kouichi Itoh	Kittipong Vairoj. (MUST)

存在である。ただし過去に同じ人が両者を兼ねた例は多い。大会が開かれた時の歴代 WFUMB 会長も、Table 3 に示した。

3. アジア超音波医学学術連合 (AFSUMB)

上述のように、WFUMB は最初いくつかの国の超音波学会が集まって発足し、その段階で地域ごとの federation が成立していたのは EFSUMB だけであったが、当初の構想に基づいて早急にほかの地域でも federation を立ちあげることが要請された。アジアにおいては、日本超音波医学会のほかに、中国・韓国・インドネシア・マレーシア・インドなどにすでに超音波学会が存在し、ことに中国とインドには複数の学会があった。これが後に AFSUMB にとって大きな宿題をかかえる原因となる。

とにかく、1979年に宮崎で第2回の WFUMB 大会を、WFUMB 会長と大会会長を兼任して開催された和賀井教授は、その後上記の5学会に声をかけて AFSUMB の組織化に着手された。そして、1985年に第4回の WFUMB 大会がシドニーで開催された際、大会に参加したアジア各国の代表に呼びかけ、AFSUMB 設立に向けての会合をもち、とりあえず同年11月20-22日に神戸で横井浩会長が主宰された日本超音波医学会第47回研究発表会に5学会の代表を招待する形で、設立準備会を設けることになった。

神戸では、和賀井教授の意を体した福田守道札幌医大教授（のち AFSUMB の事務総長、WFUMB の会長を歴任された）が中心になって、各学会代表と文字どおり膝づめ談判を行い、AFSUMB の Constitution を作成し、この5学会に日本超音波医学会を加えた6学会で最初の AFSUMB 理事会を開いて、AFSUMB 結

成を正式に宣言した。そこで、最初の大会は2年後の1987年6月24-26日に予定されていた日本超音波医学会第50回記念研究発表会（会長：竹内久弥順天堂大教授）に併せて、東京で旗あげすることも決まった。初代会長兼大会会長には和賀井教授、事務総長には福田教授、会計には渡辺が就任した。

こうして、まず日本で開催された AFSUMB 大会は、その後 WFUMB にならって会期を3年ごととし、順調に継続されている（ただし第2回の AFSUMB '89 は第1回の2年後に行われた）。開催地と host society 及び大会会長、それに歴代の AFSUMB 会長を Table 4 に示す。以前は、WFUMB 大会のあったつぎの年に AFSUMB があり、そのまたつぎの年に EFSUMB があって、翌年に WFUMB に戻るという circulation が成立していたが、数年前から EFSUMB は毎年開催に決まったので、この巡り合わせはみられなくなった。

AFSUMB の管理機構は、WFUMB のそれとほぼ同様である。違うところは、会長指名理事を若干名ということにして、各加盟学会からなるべく1人は理事会に出席できるようにしているところである。AFSUMB 全会員数の10%以上を占めている学会は、JSUM・CTSUM（台湾）・KSMU・（韓国）の3学会で、それぞれ1人の理事を指定しており、理事会の総定員は15名である。現在（1998-2001年）就任している人々の氏名を Table 5 に示す。

はじめ6カ国の超音波学会でスタートした AFSUMB には、年を追うごとに参加する国が増えていった。まずタイが加入した。AFSUMB 結成後間もなくの頃バンコクの Rajavithi 病院の産婦人科医 Dr. Kittipong Vairojanavong が渡辺のすすめに応じてタイ超音波医学会の創設にとりかかり、年時を経ずしてそ

Table 5 PRESENT OFFICERS AND COUNCILLORS OF AFSUMB
(1998-2001)

President :	Hiroki Watanabe (Japan=JSUM)
President-Elect :	Kittipong Vairojanavong (Thailand=MUST)
Vice-President :	Fon-Jou Hsieh (Taiwan=CTSUM)
Immediate Past-President :	Hsieh Yao Chen (Taiwan=CTSUM)
Secretary :	Byung-Ihn Choi (Korea=KSMU)
Treasurer :	Shoichi Senda (Japan=JSUM)
Administrative Councillors :	Yong Ho Auh (Korea=KSMU)
	Ravi Chandran (Malaysia=MSUM)
	Chen-Wen Chiang (Taiwan=CTSUM)
	Masunori Matsuzaki (Japan=JSUM)
	Melani Setiawan (Indonesia=ISUM)
Co-opted Councillors :	Kanu G. Bala (Bangladesh=BSU)
	C. V. Vanjani (India=IFUMB)
	Jin Xi Zhang (China=SUMCMA)
Journal Editor :	Yoshihide Chiba (Japan=JSUM)

れを組織し、AFSUMBの一員となった。彼の実力と人柄は衆目の認めるところとなり、現在AFSUMBの次期会長・WFUMBの第1副会長を勤めている。

複雑な国際関係がAFSUMBに大きな影を落としたのは、中国・台湾問題であった。前述のように、中国はAFSUMB創設時のメンバーである。中国は広い国で、しかも各地方はそれぞれ独立意識が強く、あちこちに小さな超音波学会があった。AFSUMBもWFUMBも、その基本的理念として、1国を代表するのは1学会に限ることを明言している。幸い創設にあたって中国の代表となったのは、北京のDr. Jian-Fang Renを会長とするSociety of Ultrasound in Medicine of Chinese Medical Association (SUM-CMA)であった。この学会は中国政府の1機関である中華医学会に直属しており、版図は大きいとはいえないものの、国を代表するという正統性は十分で、これは今から考えても最良の選択だったと思われる。しかしその正統性があったが故に、逆に後で大問題が発生することになる。

さて、台湾では1980年代初頭にSociety of Ultrasound in Medicine of Republic of China (SUMROC)という学会が創設され、多くの会員を集め、活発な活動を始めていた。国際関係に参与することは台湾の人々に共通する願いであり、当然この学会もAFSUMBへの参加を強く希望した。しかし、今も重い桎梏となっている「二つの中国問題」が、行く手に大きく立ちはだ

かった。当時はまだ中国が今のような解放政策をとる以前であり、一方台湾は国民党の蔣経国総統の時代だったから、中国・台湾両者の関係は非常に険悪であった。その頃AFSUMBの事務総長だった渡辺がAFSUMB理事会の意向を受け、この問題に取り組むことになった。

渡辺はまず中華医学会を直接訪れ、先方のいうことを聞いてみた。交渉相手は学会の会長ではなく、中華医学会の対外連絡部主任のMr. Fu Qunというお役人だったが、それまですでいくつかの他の学術団体の交流が両者の間にあったとのことで、その例にならって、もし台湾の学術団体が国家的な組織ではなく、中国の一都市に局在する地区的学会であることを明確にできるならば、その存在を認めてもよいということだった。それを端的に示すのは団体の名称である。そこで、中国側にとって許容されうる名称の候補を三つほど提示してもらった。Taiwanの文字を使うことと、国家的組織を意味する名称は、絶対禁忌だった。

つぎに、それらの名称の候補を台湾の学会に伝えて、学会の名称を変更することが可能かどうか問いあわせた。幸い台湾側はかなり融通が利き、名よりも実をとる主義で、総統府とも交渉を重ねた末、Chinese Taipei Society of Ultrasound in Medicine (CTSUM)という名称なら承諾できると返事してきた。ここまでには、ほぼ1年が経過していた。

この回答を携えて、渡辺が1987年の暮に再び北京

を訪れ、やっと中国側の確約をとりつけることに成功した。中国政府の承認を経て、台湾の学会の AFSUMB 参加が正式に決定したのは 1988 年 10 月の AFSUMB 理事会のことで、この時理事会の全員は、今回は例外として 1 国 1 学会主義をとらないことに賛成した。CTSUM は、その後会員数 5000 人に近い台湾最大の医学会に発展し、AFSUMB '98 を大成功裡に主催したり、その機関誌 *Journal of Medical Ultrasound* が後に AFSUMB の機関誌に認定されるなど、AFSUMB の中核学会としてすばらしい貢献を果たしている。

1992 年の Seoul で の 第 3 回 の つ ぎ の 第 4 回 AFSUMB 大会は、北京に行くことが早くから決まっており、そのため AFSUMB 創立時の理事だった Dr. Ren が 1989 年に AFSUMB 次期会長に選ばれ、大会会長も兼ねる予定であった。ところが、ここで発生したのが天安門事件（1989）である。中国ではこういう大事件が起きると、政府各部門の上層部がことごとく交替させられてしまう。中華医学会のお役人は皆左遷され、当時たまたま米国に滞在中だった Dr. Ren も、何故かはよくわからないが本国へ帰れなくなってしまった。彼は彼なりに、本国と連絡をとろうとしていたし、理事会にも米国から出席しようとしていたが、結局は音信不通の状態に陥った。まだよちよち歩きの段階に過ぎなかった AFSUMB が、次期の会長と大会開催地を一気に失ってしまったのである。今から思うと、これが AFSUMB 最大の危機であった。

AFSUMB 会長の Dr. Kim（韓国）、次期会長の Dr. Chen（台湾）を中心に対策が練られ、中国に最も詳しい和賀井教授（当時 AFSUMB 学会誌編集長）と事務総長だった渡辺が事態を打開するために走り回ることになった。まず和賀井教授が中国を訪れ、新しい中華医学会の事務局と連絡をつけた結果、中国としては 1995 年の大会を何としてもぜひ主催したいという意志があることを確認できた。中国政府自体が、天安門事件以来こじれきってしまった国際関係を改善するために、積極的に各種の国際学会を受け入れようとしていたことも、追い風となったらしい。AFSUMB 理事会としては、非常の場合 1995 年の大会は、公式には中国の一地方都市ということになっている台北で開くこ

とを検討しており、台湾側もそれを了承してくれていた。しかし渡辺が再び北京へ行って、新任の中華医学会対外連絡部主任 Mr. Gu Dezhang と相談を重ねた結果、Dr. Ren は名前だけ大会会長のまま留め、古くからの中国超音波学界の重鎮である上海の Dr. Zhi-Zhang Xu（この人は政治とは無縁の人格者だった）を実質上の大会会長に立てて、実際の準備・運営はすべて中華医学会が担当することで決着できた。

約束は完全に実行され、AFSUMB '95 は 2000 人以上の参加者を得て、盛大に北京の新しい国際会議場で挙行された。中でも、完全に交通遮断された市街地を、会議場から数十台のバスを連ねて疾走して行った人民大会堂における壮麗な公式晩餐会の光景は、今でもありありと記憶に残っている。広大な大会堂を埋めつくした中国各地からの参加者たちは、初めての国際学会の雰囲気に触れて心から幸福そうだった。なお、空席となった AFSUMB 会長の仕事は、Constitution の規定により、1992 年から副会長となった渡辺が代行した。Dr. Ren は、結局大会に来ることさえできなかった。

1 国 1 学会主義の旗印は、多くの場面で深刻な問題を提起してきた。まず直面したのは、インド問題であった。AFSUMB に最初インドから加盟した学会は、Ultrasonic Society of India (USI) という New Delhi にある団体だったが、これとは別の Indian Society of Medical Ultrasound (ISMU) という Bombay（現在は Mumbai）に本拠をおく医師中心の全国規模の団体が、すでに正式に WFUMB に加盟してしまっていたことによって問題が表面化した。AFSUMB 結成以前には、JSUM もそうであったように、各国の学会はそれぞれ独立で WFUMB に加盟していたのである。1 国 1 学会主義をとる限り、USI を抱えた AFSUMB は、ISMU の居る WFUMB には加盟できない。

そこで 1990 年の夏、渡辺がまた New Delhi と Bombay を訪れ、両方の学会の責任者たちと交渉し、両者をまとめて Indian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology (IFSUMB) という新しい組織を立ちあげ、この組織で AFSUMB に参加することを呼びかけた。ISMU はすぐ賛成してくれたが、USI の方は難色を示し、結局その後は音沙汰がな

くなってしまった。だから現実には起こったことは、ISMU が IFSUMB に改名しただけだったのだが、これによってとにかくこの問題は解決された。こうして、インド問題と前に述べた中国・台湾問題とを克服できた AFSUMB は、1992 年 1 月 1 日をもって正式に WFUMB に参加すると同時に、WFUMB 最大の加盟団体となったのである。

パキスタンの場合はさらに複雑だった。この国からは、何とまったく同じ Ultrasound Society of Pakistan という名称をもつ二つの学会が、ほぼ同時に AFSUMB 加盟を申し出てきたのである。ひとつは Karachi の Dr. Musarat Hasan を中心とする団体で、もうひとつは Islamabad の Prof. Saad Rana を中心とする団体であり、ややこしいことに両者ともパキスタン政府からの正式な設立認可を得ていた。これについては対処の方法がなく、模様眺めをしているうちに 10 年近い年月が経ち、やがて Prof. Rana の方の団体が消滅同然となって、Dr. Hasan の方の団体がつい最近めでたく AFSUMB に加盟を果たした。

フィリピンの場合は、「ひとつの専門に偏らない」と

いう AFSUMB のもうひとつの旗印が議論を呼んだ例である。最初に加盟を申しこんできた Ultrasound Society of Philippines は放射線学会の 1 部門で、会員が放射線科医に限られていることが障害となった。そこで婦人科医が中心だが他の専門も包含している Philippine Society of Ultrasound in Clinical Medicine (PSUCM) が対象として選ばれた。

現在 AFSUMB の加盟学会は Table 6 に示す 12 学会だが、その他新たに AFSUMB への加盟が検討されている国々は、カンボジア・モンゴル・ネパール・ベトナムなどである。ベトナムについては旧南北ベトナムの間でうまく 1 国 1 学会主義を確立できるかどうか、大きな鍵となってくるだろう。

4. おわりに

WFUMB と AFSUMB の成り立ちと現状を簡単に紹介するつもりが、つい永年の経緯にまで筆が及んで、長文にわたってしまった。

世界にはいろいろな国際的な医学会があるが、その多くは個人が会員として参加するか、またはせいぜい

Table 6 AFFILIATED SOCIETIES AND MEMBERSHIP OF AFSUMB

Affiliated Society	Office	1999 Members
Japan Society of Ultrasonics in Medicine (JSUM)	Tokyo	10,136
Chinese Taipei Society of Ultrasound in Medicine (CTSUM)	Taipei	4,811
Korean Society of Medical Ultrasound (KSMU)	Seoul	1,050
Society of Ultrasound in Medicine of Chinese Medical Association (SUMCMA)	Beijing	293
Medical Ultrasound Society of Singapore (MUSS)	Singapore	205
Medical Ultrasonic Society of Thailand (MUST)	Bangkok	180
Malaysian Society of Ultrasound in Medicine (MSUM)	Kuala Lumpur	165
Indonesian Society of Ultrasound in Medicine (ISUM)	Jakarta	140
Indian Federation of Ultrasound in Medicine and Biology (IFUMB)	Mumbai	120
Ultrasound Society of Pakistan (USP)	Karachi	102
Bangladesh Society of Ultrasonography (BSU)	Dhaka	100
Philippine Society of Ultrasound in Clinical Medicine (PSUCM)	Manila	50
Total		17,352

国の学会単位で構成されているかであって、WFUMBのように世界を6地域に分割してfederationを置き、それぞれ多数のnational bodiesを傘下に収めるというような雄大な構想をもった国際学会は、寡聞にしてはかに知らない。構想するだけなら容易だが、それが現実にはきわめて順調に運営されているという事実は、一驚に値すると思う。

しかし加盟国の増加とともに、それぞれの国の間で、federationに対するニーズに大きな隔差があることが、次第に明確になってきている。開発国では最新技術の情報交換が学会の主要な存在意義だが、開発途上国では安価な汎用機器の普及と基礎的な手技の教育とが、学会に対する絶対的な要望となって具現化してきている。これにどう応えるかが、これからのWFUMBやAFSUMBに求められる大きな課題である。

すでにJSUMは、AFSUMB加盟国を対象に独自の奨学金制度を設けて、ここ10年来奨学生の日本国内での超音波技術の習得に寄与してきた。JSUM部内でのこの制度に対する評価は必ずしも一定していないが、アジア各地の超音波学会を訪れると、これらの奨学生たちはJSUM scholarship winnerとしてきわめて高い地位を保証されていることを知るのである。最近、台湾や韓国の学会も奨学制度を開始した。このすばらしい制度を今後ますます拡充し、一層の国際貢献に資するのが、先進国日本の務めではないかと考える。

文 献

- 1) Wells PNT. History. In: de Vlieger M, Holmes JH, Kratochwil A et al (ed), Handbook of clinical ultrasound. New York, John Wiley & Sons, 1978: pp.3-13.
- 2) 和賀井敏夫: 超音波診断法事始. 東京, 日本プランニングセンター, 1987.

History of WFUMB and AFSUMB

Hiroki Watanabe

President, WFUMB; President, AFSUMB

The history and system of the World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (WFUMB), as well as the Asian Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB), are described briefly. WFUMB combines six area federations throughout the world, and consists of approximately 50,000 members from 50 countries, while AFSUMB is the largest area federation affiliated with WFUMB, consisting of approximately 17,000 members from 12 countries in Asia. A further increase in the number of members and the number of affiliated societies is expected with the advancement of ultrasound technology and the distribution of machines.

(*J Med Ultrasound* 2001;9:167–175)

KEY WORDS: • administration • AFSUMB • history • WFUMB

INTRODUCTION

The World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology (WFUMB) is a federation organized by six area federations from around the world, consisting of approximately 50,000 members from 50 countries. The Asian Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB) is the largest federation in WFUMB, consisting of approximately 17,000 members from 12 countries in Asia. A few new societies are expected to join the federation in 2001.

A quarter of a century for WFUMB, while one and a half decades for AFSUMB, have now elapsed since they were established. The pioneers concerned with setting them up are now retiring one by one, and the leadership is being taken over by members of younger generations. With the lapse of time, the process of how the organizations were established,

as well as the original aim and spirit of the federations, has not always been understood correctly, even by the young leaders. This is why the author wishes to contribute here a history of the federations from his point of view.

A large part of this review article has already been published in Japanese in the *Journal of Medical Ultrasonics*, the official organ of the Japan Society of Ultrasonics in Medicine (JSUM) [1]. For the present occasion, the author has rewritten the paper in English at the request of *Journal of Medical Ultrasound (JMU)*, the official organ of AFSUMB.

WORLD FEDERATION FOR ULTRASOUND IN MEDICINE AND BIOLOGY (WFUMB)

It is well known that diagnostic ultrasound (US) originated almost simultaneously in three areas in the world — the United States, Europe and Japan

Presented in part at AFSUMB 2001 in Kuala Lumpur, Malaysia, on October 25, 2001.

Third Department of Basic Medicine, Meiji University of Oriental Medicine (Graduate School), Kyoto, Japan.

Address correspondence and reprint requests to: Professor Hiroki Watanabe, Third Department of Basic Medicine, Meiji University of Oriental Medicine, Hiyoshi-cho, Funai-gun, Kyoto, Japan 629-0392.

— in the 1950s. Since each development started independently of the others, and there was no contact between them, it is hard to identify which was the real pioneer. This may be one of the reasons why no one involved in the field of US has yet won the Nobel prize, in spite of prizes having been won in the fields of computed tomography and magnetic resonance imaging.

Under the circumstance of its origins, it was only natural that, at some stage, discussions on US at an international level would eventually be necessary, when results of developments made by the early pioneers were disclosed between them. The first World Congress of Ultrasonic Diagnostics in Medicine was organized in Vienna in 1969, by mutual agreement.

To understand the progress made at the first congress, we have to look at the state of the national organizing societies for US in the various countries at that time.

It is thought that the US society having the longest history may be the American Institute of Ultrasound in Medicine (AIUM) in the United States, of which the origin goes back to 1952. They are now preparing for the 50-year anniversary celebration in 2002. In the beginning, however, the society was organized for US therapeutic machines, while papers on US diagnosis appeared only after 1964.

The second oldest US society in the world is the JSUM, established in 1961. It focused mainly on diagnosis from the very beginning.

The first international organization for US was the *Societas Internationalis pro Diagnostica Ultrasonica in Ophtalmologia* (SIDUO). Although US in the field of ophthalmology has not been very active in recent years, this was the leading field in the early days. Its first congress was organized in 1964 in Berlin, and the third one in 1969 in Vienna. The above-mentioned first World Congress was actually formed as a part of this SIDUO III, and with the intensive support of SIDUO itself. The World Congress thus owed a debt to SIDUO; hence, this organization was included as a member society of WFUMB when WFUMB was formed later, in spite of the nature of SIDUO, which was not a geographic federation but rather a specialty group. The WFUMB Constitution, Article 4.3.2, states that: “Not more than one international specialty organization may become affiliated for any specialty”. This sentence conflicts with the basic policy of WFUMB, consisting of geographic federations, but

is a remaining trace of the history with regard to SIDUO, which now has, in fact, almost dissolved.

It must be noted that participants in the World Congress in Vienna gathered not as national delegates, but as individuals. The idea was created among them, however, that a joint international organization, to consist of national or federational units, should be established as a matter of urgency because, even at that period, several national bodies had already been set up in the United States, Japan, Germany and Australia. Thus, a tentative plan was mooted that the detailed rules for the organization would be completed before the next World Congress to be held in Rotterdam 3 years later. Responding to this, the European Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (EFSUMB), made up of the national US societies in Europe, was established in 1969 and became the first geographic federation to be affiliated to WFUMB when it was later formed.

The planned organization was realized at the second World Congress in Rotterdam in 1973. Its official name was decided as the WFUMB, and the first General Assembly with the first congress was set for 3 years later in San Francisco. In addition, a basic concept of WFUMB, that it would unite each geographic federation to be established throughout the five continents of the world in the future, was also approved.

The first WFUMB Congress was successfully held in San Francisco in 1976 (WFUMB '76), hosted by AIUM and with the mutual cooperation of AIUM, EFSUMB, JSUM, the Australian Society for Ultrasound in Medicine (ASUM), SIDUO and others. From then onwards, the organizational activities of geographic federations throughout the continents of the world accelerated. After EFSUMB, AFSUMB came on the stage in 1985, and this will be mentioned later. AIUM joined Canada to become the North American federation. The ASUM changed its name to the “Australasian Society”, which was inclusive of Australia and New Zealand. In South America, the Latin-American Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (FLAUS) was formed, while in Africa, the Mediterranean and African Society for Ultrasound (MASU) was established, to which Italy and Turkey joined, in consideration of the unique situation in Africa with many developing countries. Thus, the WFUMB has advanced at present to an enormous scientific organization, covering the world with a network of

six geographic federations. The office and membership of each of them in 1998 are shown in Table 1.

All activities of WFUMB rely upon annual fees from the six affiliated geographic federations. The amount of this fee is US 1.5 dollars per member annually. A large majority of the federations collects an annual fee of US 3 dollars from each affiliated national society, of which half is transferred to WFUMB. Since the total membership of WFUMB is nearly 50,000, the total income of WFUMB per year is a little more than US 70,000 dollars, provided 100% of the fees are paid on time. Therefore, WFUMB is poor and “save money” has been its motto from the beginning. In recent years, WFUMB has been very much engaged in important projects like safety and education; thus, budgetary questions are always very pressing.

The administration of WFUMB is carried out by 17 members, including six officers (President, President-Elect, Vice-Presidents I and II, Secretary and Treasurer), six Councilors, three Co-opted Councilors, Immediate Past-President and Journal Editor. Co-opted Councilors and the Journal Editor have no voting rights. The administrators for the current term (2000–2003) are listed in Table 2.

Officers are elected in the General Assembly,

which is held at the congress every 3 years. However, voting is held by mail ballot from the affiliated federations prior to the General Assembly. The President-Elect is appointed as the next President without further voting. Vice-President I will take over the responsibilities of the President when he or she has an accident. Vice-President II will substitute for the Secretary or the Treasurer under the same circumstances.

With regard to Councilors, any federation having members totaling more than 10% of the entire membership of WFUMB can appoint one Councilor without voting. The other two Councilor positions are filled by voting among the small federations having less than 10% of the membership. However, voting has not been carried out in recent years, because the only federations corresponding to this rule are the ASUM and MASU. Co-opted Councilors are appointed by the President to rectify any imbalance among the elected members, in terms of their specialties or between federations. The administrators are thus appointed on the basis of each federation, but are requested to dedicate their activities only to the benefit of WFUMB itself, independently from their own federations. The term for the administrators is 3 years, except for the Journal Editor.

Table 1. Affiliated federations and membership of WFUMB

Affiliated federation	1998 Office	1998 Membership
Asian Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (AFSUMB)	Seoul, Korea	17,365
European Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (EFSUMB)	London, UK	12,522
American Institute of Ultrasound in Medicine (AIUM)	Laurel, MD, USA	7,005
Latin-American Federation of Societies for Ultrasound in Medicine and Biology (FLAUS)	São Paulo, Brazil	4,840
Australasian Society for Ultrasound in Medicine (ASUM)	Willoughby, NSW, Australia	1,232
Mediterranean and African Society for Ultrasound (MASU)	Piacenza, Italy	511
	Total	43,475

Table 2. Current officers and councilors of WFUMB (2000–2003)

President	Hiroki Watanabe (Japan, AFSUMB)
President-Elect	Marvin C. Ziskin (USA, AIUM)
Vice-President I	Kittipong Vairojanavong (Thailand, AFSUMB)
Vice-President II	Hassan A. Gharbi (Tunisia, MASU)
Secretary	Søren Hancke (Denmark, EFSUMB)
Treasurer	Christopher RB Merrit (USA, AIUM)
Immediate Past-President	Harald Lutz (Germany, EFSUMB)
Administrative Councilors	Masunori Matsuzaki (Japan, AFSUMB) Michel Claudon (France, EFSUMB) Lawrence D. Platt (USA, AIUM) Luiz Antonio Bailão (Brazil, FLAUS) Robert Gill (Australia, ASUM) Elisabetta Buscarini (Italy, MASU)
Co-opted Councilors	Byung Ihn Choi (Korea, AFSUMB) Alfred Kurtz (USA, AIUM) Giovanni Cerri (Brazil, FLAUS)
Journal Editor	Peter NT Wells (UK, EFSUMB)

After the first event in San Francisco, WFUMB congresses have been smoothly and successfully organized in various cities around the world every 3 years. The venue, host society and name of the President of each congress are listed in Table 3. The next congress, WFUMB 2003, will be held in Montreal from June 1 to 6, 2003, as a joint convention with the AIUM Annual Meeting. Following WFUMB 2003, WFUMB 2006 will be hosted by the Korean Society of Medical Ultrasound (KSMU) in Seoul from October 21 to 25, 2006. According to the WFUMB Constitution, the WFUMB President and

the President of the congress shall be independent of the other. In the past, however, some WFUMB Presidents have organized congresses themselves. The names of the WFUMB Presidents at the time of each congress are also listed in Table 3.

ASIAN FEDERATION OF SOCIETIES FOR ULTRASOUND IN MEDICINE AND BIOLOGY (AFSUMB)

As mentioned above, the only geographic federation established at the beginning of WFUMB was the

Table 3. WFUMB Congresses

Congress	Venue	Host Society	Congress President	WFUMB President
WFUMB '76	San Francisco	AIUM	Gilbert Baum	Gilbert Baum (SIDUO/AIUM)
WFUMB '79	Miyazaki	JSUM	Toshio Wagai	Toshio Wagai (JSUM)
WFUMB '82	Brighton	BMUS	Patricia Morley	Hans Müller (SGUM)
WFUMB '85	Sydney	ASUM	George Kossoff	George Kossoff (ASUM)
WFUMB '88	Washington, DC	AIUM	Horace E. Thompson	Horace E. Thompson (AIUM)
WFUMB '91	Copenhagen	DUDS	Hans H. Holm	Francis Weill (SFAUMB)
WFUMB '94	Sapporo	JSUM	Morimichi Fukuda	Morimichi Fukuda (JSUM)
WFUMB '97	Buenos Aires	FLAUS	Alberto E. Belinsky	Barry B. Goldberg (AIUM)
WFUMB 2000	Firenze	SIUMB	Luigi Bolondi	Harald Lutz (DEGUM)
WFUMB 2003	Montreal	AIUM	Alfred Kurtz	Hiroki Watanabe (JSUM)
WFUMB 2006	Seoul	KSMU	Byung-Ihn Choi	Marvin C. Ziskin (AIUM)

EFSUMB. For that reason, there was an urgent requirement to organize geographic federations in other areas. In Asia at that time, US societies existed in Japan, China, Korea, Indonesia, Malaysia and India. In particular, there were two or more societies in China and India. This later caused serious problems in AFSUMB.

Professor Toshio Wagai, one of the worldwide pioneers of US and who organized the second WFUMB Congress (WFUMB '79) in Miyazaki as the President of both WFUMB and the congress, began to construct AFSUMB with the above-mentioned national societies. He first presided over a closed meeting with representatives from those societies during the WFUMB '85 Congress in Sydney. Then, during the 47th Annual Meeting of JSUM held under the presidency of Dr. Hiroshi Yokoi in Kobe from November 20 to 22, 1985, he had a preparatory committee meeting to establish AFSUMB, inviting representatives from five foreign societies to be official guests of the meeting.

In Kobe, an intensive but cooperative discussion was held in order to draw up the constitution of AFSUMB under the leadership of Professor Morimichi Fukuda (the first AFSUMB Secretary and the seventh WFUMB President) and the first AFSUMB Administrative Council Meeting was opened to declare formally the establishment of AFSUMB. At the same time, it was decided that the first AFSUMB Congress (AFSUMB '87) would be associated with the 50th Memorial Annual Meeting of JSUM in Tokyo on June 24 to 26, 1987, under the presidency of Professor Hisaya Takeuchi (6th WFUMB Vice-President). Professor Wagai was appointed as the first AFSUMB President and the congress President, while Professor Fukuda and the author were the first AFSUMB Secretary and Treasurer, respectively. Other members of the original

council were: Dr. Willyarto Wibisono (Indonesia, President-Elect), Professor Chu-Wan Kim (Korea, Vice-President), Dr. Jian-Fang Ren (China), Dr. Shing-Kwee Ong (Malaysia) and Dr. VR Singh (India). Many of these persons later went on to hold important positions in AFSUMB.

Thus, the AFSUMB Congresses started in Japan have been successfully held every 3 years, following the system of WFUMB, though the second congress (AFSUMB '89) was planned 2 years after the first one. The venue, host society and name of the President of each Congress are listed in Table 4. In the early years, there was a rotation with the effect that AFSUMB congress was set for the year following the WFUMB Congress, and the EFSUMB Congress was set for the year following AFSUMB. The rotation was abandoned a few years ago because EFSUMB now holds a congress once every year.

The administrative mechanism of AFSUMB is similar to that of WFUMB. The only difference is that the number of Co-opted Councilors is intended to be "several", instead of "two" as set in the WFUMB Constitution, in order to permit the attendance of representatives from any of the small societies at the table of the Administrative Council. Three large affiliated societies, namely, JSUM, Chinese Taipei Society of Ultrasound in Medicine (CTSUM) and KSMU make up more than 10% of the total membership; thus, they delegate one Councilor to the council. The current total number of officers and councilors of AFSUMB is 15. The administrators for the present term (1998–2001) are listed in Table 5.

AFSUMB has expanded year by year. First, Thailand joined. Shortly after the establishment of AFSUMB, the author was invited to Rajavithi Hospital in Bangkok for the opening ceremony of the newly constructed Stone Crushing Center. After

Table 4. AFSUMB Congresses

Congress	Venue	Host society	Congress President	AFSUMB President
AFSUMB '87	Tokyo	JSUM	Toshio Wagai	Toshio Wagai (JSUM)
AFSUMB '89	Bali	ISUM	Willyarto Wibisono	Willyarto Wibisono (ISUM)
AFSUMB '92	Seoul	KSMU	Chu-Wan Kim	Chu-Wan Kim (KSMU)
AFSUMB '95	Beijing	SUM-CMA	Jian-Fan Ren	Hiroki Watanabe (Acting)
AFSUMB '98	Taipei	CTSUM	Hsi-Yao Chen	Hsi-Yao Chen (CTSUM)
AFSUMB 2001	Kuala Lumpur	MSUM	S. Raman	Hiroki Watanabe (JSUM)
AFSUMB 2004	Utsunomiya	JSUM	Kouichi Itoh	Kittipong V. (MUST)

the ceremony, the author was introduced to a gynecologist in the hospital, Dr. Kittipong Vairojanavong, who had been intensively involved in US for many years. As no US society existed in Thailand at the time, I recommended that one be organized urgently. He followed up the suggestion and the newly established Medical Ultrasonic Society of Thailand (MUST) was affiliated to AFSUMB shortly thereafter. He is now dedicating himself to AFSUMB as President-Elect, and to WFUMB as Vice-President I.

The complicated relationship between China (mainland) and Taiwan had a marked influence on AFSUMB. It is a basic policy of AFSUMB, as well as of WFUMB, that only one society can represent one country. As mentioned already, China was one of the original members of AFSUMB. China is large and its local areas are rather independent from each other. Numbers of small US organizations were, accordingly, to be found in some prominent cities even at that time. Luckily, the society joining AFSUMB from China was the Society of Ultrasound in Medicine of Chinese Medical Association (SUM-CMA), of which the President was Dr. Jian-Fang Ren. This society belongs directly to the CMA, which is a part of the Chinese government. Therefore, its legitimacy was substantial, in spite of its having only a few hundred members. This selection is thought to have been for the best, even looking back

now. Because of the legitimacy, however, a serious problem was to occur later.

On the other hand, in Taiwan, the Society of Ultrasound in Medicine of Republic of China (SUMROC) was established in the beginning of the 1980s, collecting many members and acting vividly. The society was enthusiastic about becoming affiliated to AFSUMB. However, if this was to happen, it would mean acknowledging that two different countries existed in one China, a situation not politically acceptable to either China or Taiwan. AFSUMB entrusted the author, then serving as the Secretary of AFSUMB for that term, to find a solution to the matter.

Firstly, the author visited the CMA office in Beijing and met Mr. Fu Qun, Director of International Liaison, CMA, with Dr. Ren. Mr. Fu was a competent young officer and stated that CMA would be able to recognize the society in Taiwan, if it could be proved that the society was not a national organization but rather a local assembly based in one of the cities in China, following the precedents. The name of the society would be the simplest way to prove the case. He suggested three acceptable candidates for the name. Use of the word "Taiwan" or to imply that it was a national body was strictly prohibited.

The author transmitted this information to the Taiwan side, suggesting the possibility of changing the name of the society. Fortunately, they were

Table 5. Officers and councilors of AFSUMB from 1998 to 2001

President	Hiroki Watanabe (Japan, JSUM)
President-Elect	Kittipong Vairojanavong (Thailand, MUST)
Vice-President	Fon-Jou Hsieh (Taipei, CTSUM)
Immediate Past-President	Hsieh Yao Chen (Taipei, CTSUM)
Secretary	Byung-Ihn Choi (Korea, KSMU)
Treasurer	Shoichi Senda (Japan, JSUM)
Administrative Councilors	Yong Ho Auh (Korea, KSMU) Ravi Chandran (Malaysia, MSUM) Chen-Wen Chiang (Taipei, CTSUM) Masunori Matsuzaki (Japan, JSUM) Melani Satiawan (Indonesia, ISUM)
Co-opted Councilors	Kanu G Bala (Bangladesh, BSU) CV Vanjani (India, IFUMB) Jin Xi Zhang (China, SUM-CMA)
Journal Editor	Yoshihide Chiba (Japan, JSUM)

flexible enough for one of the suggested candidates, Chinese Taipei Society of Ultrasound in Medicine (CTSUM), to be accepted after negotiation with the government. It took almost a year to get this answer.

The author again visited Beijing with the answer to successfully confirm the agreement of the China side. In the AFSUMB Administrative Council Meeting in October of 1988, the matter was carried unanimously, under the understanding that this was an exceptional case, in which the basic policy of AFSUMB did not apply. CTSUM developed thereafter into a large society with approximately 6,000 members, and has contributed a lot to the federation. They organized AFSUMB '98 very successfully. Their journal, *JMU*, was recently approved as the AFSUMB official organ.

There was an implicit agreement among the AFSUMB Councilors that the host country of the AFSUMB '95 Congress would be China, following Japan, Indonesia and Korea. Dr. Ren was appointed as the President-Elect of AFSUMB in 1989 to be the President of the congress concurrently, according to the agreement. Shortly thereafter, the well-known "Tiananmen Square" incident occurred, in which the Chinese military killed many students who were demonstrating in front of the gate. In China, a reshuffle of important positions in the government is very usual in such cases. Mr. Fu was demoted, while Dr. Ren was not able to return to his home country from the United States, where he stayed temporarily, though the actual reason for this was unclear. In the beginning, Dr. Ren made a succession of attempts to communicate with CMA and tried to attend the administrative meetings of AFSUMB directly from the United States. However, he finally ceased to correspond with the AFSUMB office. This meant that AFSUMB, still being in the very early stages of organization, lost its next President and the next congress venue at the same time. We faced the most serious crisis in the history of AFSUMB.

As the first step in the contingency plan, Professor Wagai (Journal Editor for that term) made an urgent visit to Beijing to find out what was the new situation in the Chinese government, because he had many good friends in China. He confirmed that CMA still wished to organize AFSUMB '95, in spite of the changes in personnel. In order to try to repair the relationship with other countries that were severely disrupted by the incident, the Chinese government itself was strongly promoting such international

conventions at that time. The author (Secretary for that term) followed up on the matter by undertaking negotiations in Beijing with the new Director of CMA, Mr. Gu Dezhong, and arrived at the following solution: 1) Dr. Ren's name would be kept as Honorary President; 2) the Acting Presidency would be taken by Professor Zhi-Zhang Xu, who was a leading US researcher in Shanghai (and entirely politics-free); and 3) all practical management would be covered directly by CMA.

Mr. Gu was a typical able officer, who understood the situation very well and was able to see things through quickly. The author was impressed with the excellence of the Chinese officers who, like Mr. Gu, worked up front in the governmental offices, as well as Mr. Fu, mentioned previously.

The engagement was fully met and AFSUMB '95 was magnificently staged in a newly built convention center in Beijing, with more than 2,000 participants gathered from various parts of China. Above all, the splendid official banquet in the People's Grand Hall, reached by tens of buses rushing together without stopping by traffic control, was the highlight of the congress. The vacant AFSUMB Presidency was assumed by the author, Vice-President for that term, according to the constitution. Unfortunately, Dr. Ren could not even attend the congress.

The basic policy of AFSUMB, specifying just one society from each country, has caused difficulties on many occasions. One such occasion was the "Indian problem". The Indian society first affiliated to AFSUMB was "Ultrasonic Society of India" (USI), for which the representative was Dr. VR Singh. It later became clear that this society was, in fact, a private assembly in a technical institute in New Delhi and was without medical members, of which the size was not adequate to represent a country like India. Dr. Singh was a person with many difficulties, and he was released by the institute a few years later. Moreover, the society never paid its annual fees to AFSUMB. Regardless, the problem was revealed when it was learned that another Indian society called "Indian Society of Medical Ultrasound" (ISMU), a country-wide organization with many medical members and headquartered in Bombay, had already been formally accepted as a WFUMB-affiliated national body. Like JSUM before the organization of AFSUMB, many national bodies were independently affiliated to WFUMB in the past. If the "one society from one country" policy

had been strictly maintained, AFSUMB including USI could not be affiliated to WFUMB including ISMU.

Therefore, the author, who was the Secretary of AFSUMB for that term, had to become involved in the matter. In the summer of 1990, he visited New Delhi and Bombay with a proposal that both societies would be joined in an organization to be called "Indian Federation for Societies of Ultrasound in Medicine and Biology" (IFSUMB), which could be affiliated to AFSUMB as a national body from India. ISMU accepted the proposal immediately, while USI initially presented some difficulties and then failed to follow up with correspondence thereafter. Ultimately, what happened was that ISMU only changed its name to IFSUMB. Nevertheless, AFSUMB, which had somehow resolved both the "China-Taiwan problem" and the "Indian problem", was officially affiliated to WFUMB on January 1, 1992, as the largest federation in that body.

The "Pakistan problem" was much more complicated. From this country, two different societies having the same name, "Ultrasound Society of Pakistan" (USP), requested to be affiliated to AFSUMB almost simultaneously. One of them was a group led by Dr. Musarat Hasan in Karachi, while the other was a group led by Professor Saad Rana

in Islamabad. Moreover, both groups had received formal recognition from the Pakistan government in the same way. AFSUMB had no alternative but to watch and wait. The problem was finally automatically solved due to the inactivity of the Islamabad group nearly 10 years later. USP, with Dr. Hasan as its President, recently joined AFSUMB.

The situation in the Philippines was an example contradicting another basic policy of AFSUMB, as well as WFUMB, that: "An affiliated society should not consist of only one specialty". The "Ultrasound Society of Philippines", which first made an application for affiliation to AFSUMB, was a section of a radiology society, in which membership was restricted to radiologists. Another society, the "Philippine Society of Ultrasound in Clinical Medicine" (PSUCM), which included different specialties, was therefore affiliated, although the majority of its leaders were gynecologists.

At present, the 12 US societies shown in Table 6 are affiliated with AFSUMB. In addition, other national bodies from Mongolia, Cambodia and Vietnam, for example, are now being discussed in terms of potential affiliation. It is thus expected that the number of countries in Asia who are represented in AFSUMB will increase in the near future.

Table 6. Affiliated societies and membership of AFSUMB

Affiliated society	Office	1999 Members
Japan Society of Ultrasonics in Medicine (JSUM)	Tokyo	10,136
Chinese Taipei Society of Ultrasound in Medicine (CTSUM)	Taipei	4,811
Korean Society of Medical Ultrasound (KSMU)	Seoul	1,050
Society of Ultrasound in Medicine of Chinese Medical Association (SUMCHA)	Beijing	293
Medical Ultrasound Society of Singapore (MUSS)	Singapore	205
Medical Ultrasonic Society of Thailand (MUST)	Bangkok	180
Malaysian Society of Ultrasound in Medicine (MSUM)	Kuala Lumpur	165
Indonesian Society of Ultrasound in Medicine (ISUM)	Jakarta	140
Indian Federation of Ultrasound in Medicine and Biology (IFUMB)	Mumbai	120
Ultrasound Society of Pakistan (USP)	Karachi	102
Bangladesh Society of Ultrasonography (BSU)	Dhaka	100
Philippine Society of Ultrasound in Clinical Medicine (PSUCM)	Manila	50
	Total	17,352

CONCLUSION

Although there are many international medical organizations, the author is not aware of any organization other than WFUMB with a design plan on such a grand scale that the whole world is covered by six area federations, each consisting of many national bodies. Drawing up a design is easy, but it is astonishing that this design has already been realized and is very active.

It is being revealed, however, that there is a dissociation of needs for the federations among the various countries, with the increase in the number of affiliated societies. The main interest is in the exchange of information on new technologies in the developed countries, while an

urgent need for machines and education is noticed in the developing countries. The current most important task for WFUMB and AFSUMB must be how to respond to these varied demands appropriately and in time.

REFERENCES

1. Watanabe H. WFUMB and AFSUMB. *J Med Ultrasonics* 2001;28:1058–66.
2. Wells PNT. History. In: de Vlieger M, Holmes JH, Kratochwil A, et al, Eds. *Handbook of Clinical Ultrasound*. New York: John Willey & Sons, 1978: 3–13.
3. Wagai T. *The Dawn of Diagnostic Ultrasound*. Tokyo: Japan Planning Center, 1987. [In Japanese]